

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

テキスト 4

『星空の余韻』

涼やかな風が頬をなぞり、夏の夜空を見上げる。雲一つない闇に、月明かりが浮かんでいる。人気のない駅のホームで、私と隆宏（たかひろ）はベンチに座り、すでに二本、電車を見送っている。私は彼の手を握って、自分一人が寂しがっているような気がした。

「あっちは寒いんでしょう。そんなに身軽で平気？」

「大丈夫、梨香（りか）は本当に心配性だな。毎日連絡するよ。今日も元気に過ごしてますって」

「無理しなくていいよ。仕事が大変だろうし」

「そんなことないよ。これからたくさん話そう、会えないぶん」

精一杯の笑顔を取り繕い、私は「ありがとう」と言う。隆宏は電車と飛行機を乗り継いで海外の転勤先に戻り、しばらく会うことが叶わない。会えることが当たり前でなく、別れ際はひどく寂しい。けれど、彼に笑って欲しいと願うほど、私は口をつぐむ。

「冬休みは、隆宏のところに遊びに行くね。いっぱい写真を撮って、思い出を作って」

「そうだな。てか、そろそろスマホ変えなきゃ。写真で容量がパンパンになって。ほら」

時折、通り過ぎる車の音を聞きつつ、私は隆宏のスマホを覗き込む。画面に映し出されたフォトアルバムは、二人で出掛けた場所や過ごした季節で埋め尽くされている。けれど、ある時を境に見知らぬ街の写真が増え、恋人の充実した生活が遠く感じられた。

「もう行かなきゃ。飛行機の時間、間に合わなくなるし」

「うん、行ってらっしゃい。身体には気を付けて」

その時だった。電車が近づく音が聞こえ、遮断機が下りる。隆宏は手を握ったまま立ち上がり、遠くにある光の塊を見る。別れの瞬間が迫っていた。真昼の蝉しぐれはいまだ止まず、冬はあまりに遠い。私は名残惜しさを堪えて彼と抱き合い、広い背中を見送る。乗客がほとんどいない電車に乗り込む恋人は、切なげな表情を顔に浮かべた。ドアに遮られた時、私はとっさに電話をかける。電車は星に導かれるように、夜更けの街を走っていった。

「ごめん。別れたそばから、寂しくなって」

「うん。こっちこそ、ごめん」

「さっきまで、一緒だったのにね。ほんと、ごめん」

スマホを耳に押し当て、隆宏の声に身をゆだねる。私達はお互い、謝ってばかりだ。そう伝えたと、彼は「ふふっ」と笑い、しばらく黙り込んだ。

「星が綺麗だよ。見える？ 明日も晴れそうだな」

電車が揺れる轟音が響いた時、ふと、隆宏がビデオ通話に切り替える。画面に映ったのは真っ暗闇で、頭上のきらめく星空とは随分違っていた。

「そうか、スマホじゃやっぱり伝わらないか」

スマホが熱を帯びていた。話しながらスマホのスケジュールを見ると、隆宏の誕生日や付き合い始めた記念日が登録されている。画面越しに祝う二人の未来を思う。聞き馴染んだ声が夜道の静けさを包み、私はまぶたの中ではにかむ恋人を描いた。星の輝きを声と指でたどりながら、私達は互いの日常へと歩いてゆく。

(了)